

医師から「うれしい言葉」

肝硬変末期の武田靖男さん(67)の自宅2階(千葉県浦安市)で、2回目の「人生会議」が始まった。

冒頭、靖男さんは、心境の変化を口にした。

昨年7月に最初の入院をして以来、最期の医療やケアのことは自分で決めたいと思っていた。病院の医師に「悪くなるだけ」と言われていたし、誰にも負担をかけたくない。2月の人生会議では、延命治療や排せつの介助はほらないなどの希望を伝えた。

けれど、人は一人では生きられないようだ。今年4月、在宅医療に切り替えてから、「自分の人生はみんなの人生でもあるのか」と考えるようになった。

「決めてしまったということではなく、ドクターとか訪問看護師さん、ケアマネジャーさんと相談しながら考えたい。自分一人で(意

思を)決めるのが人生会議じゃない、と思うようになって……」。穏やかな口調で靖男さんが言った。

当然、病状や残された時間のめどを共有することが、より重要になる。

妻の厚子さん(67)が突然、切り出した。「先生！夫は違うって言うんですけど、末期ですよね」



「ひまわりクリニック」院長の山田智子さん(48)が応じた。山田さんはスマートフォンを使って参加していた。

肝硬変には、A(軽症)、B(中等症)、C(重症)の3段階がある。「靖男さんは、Bに近いCです」。末期という言葉は使わなかった。1か月間のやりとりで、靖男さんの病状がこれまで末期のひと言で片づけられ、夫婦を追い込んできたことに気づいていたからだ。思いつめるにはまだ早いことを、正確に伝えたいと思った。

「なんて優しいんですよ」。厚子さんがうめくように言葉を吐き、尋ねた。「じゃ、まじめに生活すれ

ば、もうちょっと人生を楽しめるってことですか」
「そう思っています」
その瞬間、厚子さんのなかに強い感情が込みあげた。やれる！ まだやれる！ もっともっと出かけることだってできる！

10人が参加する人生会議の空気が変わった。みんなが、安堵と喜びをわかちあった。山田さんが、「肝臓の病気も長くつきあっていたから、お教えできたら」とつけ加える。今度は、なるほど、という空気が広がった。

靖男さんは、眼鏡がずり落ちて指さすのを指摘され、「おーっ」と声をあげて慌てて直した。Bに近いC……。重いとはいえ、うれしい言葉だ。肝硬変とうまくつきあうコツをすぐにも知りたかったが、「小出しに聞いて、ちょっとずつ幸せになっていこう」と思い直した。

武田靖男さん(左から2人目)、厚子さん(左端)夫婦と、人生会議の参加者たち
(5月13日、鈴木毅彦撮影)



*過去記事はヨミドクターで